子育て世代のパーソナルネットワーク
孤立・競争・共生

荒牧草平（大阪大学）

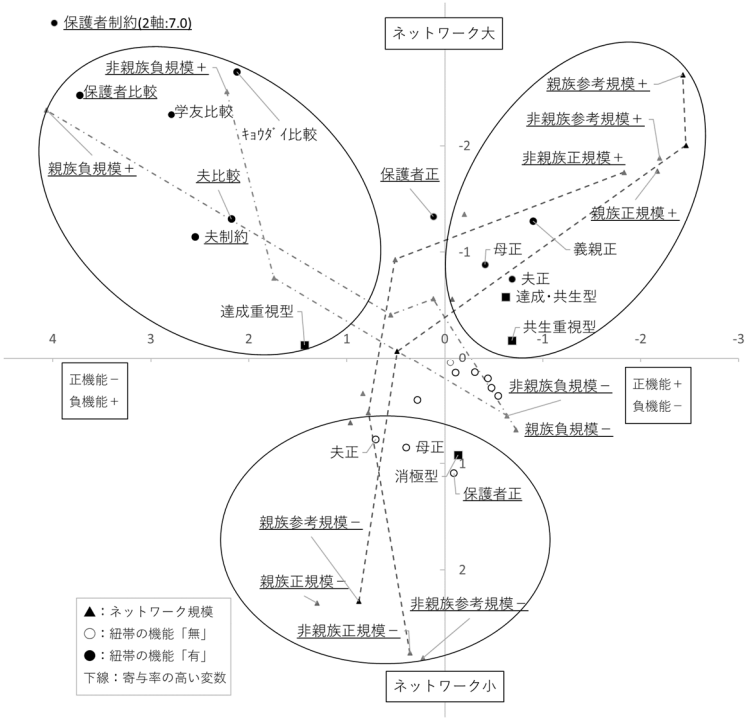
日本の家族社会学における子育てネットワークに関する研究は、乳幼児を持つ母親に対する育児支援を中心に展開してきた（落合 1989；関井ほか 1991；久保 2001；前田 2004, 2008；松田 2001, 2008；星 2011, 2012 など）。現代の日本社会では、親（特に母親）が単一の育児主体となりがちであるため、子育ての環境は、親がどのような育児ネットワークを形成し、様々な育児主体との連携をどのようにコーディネイトするかに規定されることになる（渡辺 1994）。また、幼い子どもの育児には手間もかかり、親の不安も大きいが、人間関係に恵まれた親は育児不安を持ちにくいことが知られている（牧野 1982）。これらのことを考慮すれば、上記のような先行研究のアプローチは理解できるものと言える。

しかし、子育てに対するネットワークの影響は、「育児期」の「支援」にとどまるわけではない。前者について、親がどのようなパーソナルネットワークを築くかは、育児期における子育ての負担や親の心理的安定だけでなく、「ポスト育児期」における子育てのあり方や教育方針の選択、さらには親自身の価値観や社会観にも関わると考えられる。また、後者について、ネットワークは、支援を与えてくれるだけでなく、規範的制約機能、参照機能（模範機能・比較機能）、居場所機能、浸透機能など、多様な機能を果たすことも指摘されている（荒牧 2022）。

以上をふまえ、本研究は、子育て中の保護者を対象とした調査データを用いて、親たちが誰とどのようなパーソナルネットワークを築いているのかや、ネットワークの多様な機能が、育児不安・養育態度・子どもの将来に対する価値志向などとどのように関連するのかを多角的に検討することを目的とする。分析に用いるのは、2021 年秋に南関東の一都三県に居住する小中学生の父母を対象に実施した質問票調査 ── 母親は層化二段無作為抽出したサンプルへの郵送調査・父親は調査会社のモニターを対象とした WEB 回答方式 ── のデータである。

主な分析結果は以下の通りである。1）子育て世代の人づきあいの様相は、特に女性の場合、**孤立・競争・共生**という 3 つのキーワードでとらえられる。2）**共生**：支援・居場所・模範といった ego にとって正の機能を持つ弱い紐帯のネットワークを豊富に持つ人たちは、育児不安になりにくく、肯定的態度で子どもに接し、子どもが人々と協力し合って世の中に貢献する大人になることを求めるとともに、弱者救済が重要であると考え、幸福感や社会に対する信頼感も高い傾向にある。3）**競争**：比較・制約機能を果たすネットワーク規模が大きく、特定の相手──特に、女性はママ友、男性は同僚──と強い紐帯で繋がりライバル関係にある人々は、所得が高く、子どもに地位達成を求め、小学生の子どもに塾通いをさせるとともに、子育てに対する不安感が強く、業績給が重要だと考え、幸福感や信頼感はあまり高くない傾向を持つ。4）**孤立**：ネットワーク規模が小さく、孤立して子育てを行いがちな人々は、所得や学歴が最も低い層であり、子どもに拒否的態度を取りやすく、子どもの将来に対してあまり強い期待を持たない傾向にある。

以上より、共生的な弱い紐帯を築くような社会的な環境整備が、向社会的態度や社会的連帯の鍵になると解釈できる。



（キーワード：ネットワークの多様な機能、共生、子育てネットワーク空間）